

月刊

2018

7
月号

みんぱく



特集 モノに願いを

宗教的なモノをめぐる 八木百合子／チベットの供養塔チオルテン 小西賢吾
ヒンドゥー教の神とモノ 福内千絵／トルコのイスラーム礼拝用絨毯 田村うらら
日用品で呪いを吹っ飛ばす 中川千草



神人共食のしつらい

小倉 美恵子

プロフィール
1963年神奈川県生まれ。文筆家、映画プロデューサー。2006年（株）ささらプロジェクトを設立。2017年川崎市文化賞受賞。著書に『オオカミの護符』（新潮社）、『諏訪式』（晶文社より出版予定）、映画に『オオカミの護符』（文化庁映画賞文化記録映画優秀賞ほか）、「つし世の静寂（しじま）」にも（由井英監督）、「ものがたりをめぐる物語」（製作中）がある。

座敷に円坐し、念仏を唱えながら大きな数珠を繰り返す人々。上座には、それを見守るように掛け軸が掲げられている。念仏講の「宿（当番）」の家では、掛け軸や数珠を預かり、馳走を用意し、講中の人々に先祖供養をしてもらう。

川崎市北部の農家の我が家には、今でも順番に掛け軸が巡ってくる。しかも、時を違えていくつも掛け軸がある。これは、複数の「講」に参加している証でもある。講の数だけ集落を巡り続ける掛け軸には、神や仏の姿が描かれているが、講の種類ごとに象徴する神仏が異なる。

映画「オオカミの護符」では、山岳信仰の御嶽講を取材しているが、そこでは大口真神（ニホンオオカミを神格化したもの）の姿が描かれた掛け軸の前に集落の講中が集う。同じ山岳信仰の榛名講、大山講をはじめ、無尽講、地神講など、十指に余るほどの講に参加している集落もある。

冠婚葬祭や屋根の葺き替え、あるいは道普請、川普請など、集落で暮らすには、皆で力を合わせる必要があった。講はその基盤であったが、一方で閉鎖的な前近代社会の象徴と見られ、様変わりする暮らしの中で、刻々と消えつつある。

この前近代のコミュニティを支えてきた講にも、

具に見てみると、現代人の視点から学ぶべき点が浮かび上がってくる。

わが土橋村には、寛保二（一七四二）年にすでに御嶽講の記録があることから、少なくとも一三〇〇年の間、掛け軸は集落の中を巡り続けていると考えられる。ひるがえって、近現代社会が生んだものの中に、果たして三世代以上をまたいで伝わるものがあるだろうか……、と考えると心もとなない。

なぜ、掛け軸は生き永らえたのか。取材が続けるうちに、掛け軸は誰の所有物でもないことに改めて気づかされた。ありとあらゆるものが個人所有となつている現代社会にあつて、誰のものでもないことで世代を超えてきた掛け軸は示唆に富んでいる。そして、講に集うのは現世を生きる人間だけではないのだ。掛け軸の前には神人共食の場ができる。そこには集落に生きた祖先や、恵みを与えてくれる風土が共にあり、人々の暮らしに節度や配慮、そして安らぎを生む源になつてきたのではないだろうか。

講の消滅が相次ぐ今、誰のものでもない掛け軸は、皮肉なことにも誰も引き取り手がない。今は博物館を仮の「宿」とする掛け軸も少なくなつていく。

月刊 みんな

7月号目次

- | | |
|---|---|
| <p>1 エッセイ 千字文
神人共食のしつらい
小倉 美恵子</p> <p>2 特集 モノに願いを
宗教的なモノをめぐる
八木 百合子</p> <p>4 チベットの供養塔チョルテン
小西 賢吾</p> <p>5 ヒンドゥー教の神とモノ
福内 千絵</p> <p>7 トルコのイスラーム礼拝用絨毯
田村 うらら</p> <p>8 日用品で呪いを吹っ飛ばす
中川 千草</p> <p>10 ○○してみました世界のフィールド
アフリカ熱帯雨林の狩猟採集民とたばこ
彭 宇潔</p> | <p>12 みんなく Information</p> <p>14 想像界の生物相
半人半獣のヴィシユヌ化身像
三尾 稔</p> <p>16 新世紀ミュージアム
ウイットウォーターズランド大学
オリジンセンター・ミュージアム
池谷 和信</p> <p>18 シネ倶楽部 M
フランスのタミル人
——「ディーパンの闘い」
杉本 良男</p> <p>20 ながなんちゃ
仔ネコたちを迎え、名づけ、送り出す
永田 貴聖</p> <p>21 次号予告・編集後記</p> |
|---|---|

特集 モノに願いを

産業化やグローバル化がすすみ、モノがあふれる現代、人とモノのかかわり方は変容しつつある。それは宗教の次元においても例外ではない。だが、お守りや護符など、人びとの願いが込められた宗教的なモノは、それを所有したり、使ったりする人にとって、特別な存在であることには変わりないかもしれない。

宗教的なモノをめぐる

やぎ ゆりこ
八木百合子 民博人類基礎理論研究部

「日本人は無神論者が多い」なんてことを耳にすることがある。とはいえ、学業成就や家内安全を祈願したお守りやお札をもっていたり、道端にたたくお地藏さんの前で立ち止まる人は少なくないだろう。そうした宗教的なモノはそれを信じる人には単なるモノではなく、何か特別な力が備わっているように感じられるものである。では、地域や宗教が異なれば、どうだろうか。本特集では、聖像から儀礼の道具まで、宗教の文脈で用いられるさまざまなモノと人のかかわりを見つめ直してみたい。

クスコのニーニョ像

キリスト教徒が国民の大多数を占める南米ペルー。高地の都市クスコでは、毎年年末になると

サントウランテイクイという聖像販売市が開かれる。ここには、ニーニョの名で親しまれ、クリスマスの主役となる幼子イエスの聖像や、イエスの生誕の場面を表現した馬小屋模型の飾りなどをそろえた店が軒を連ねる。キリスト教徒にとって、クリスマスはもっとも重要な祝日のひとつであり、各家庭ではイエス誕生の瞬間を祝うために、その準備に余念がない。

この販売市の最大の目玉が、マヌエリートとよばれる聖像である。マヌエリートは、別名「クスコのニーニョ像」ともいわれ、古くから地元の人によって独自の製法で作られてきた。短い巻き毛の頭髪が特徴的なマヌエリートは、通常のニーニョ像と比べ、一種独特な風貌である。店では、アンデス高地の農民の姿に似せてポンチョや毛糸



クスコの中心に位置するアルマス広場で開かれる聖像販売市の様子(2015年)

の帽子をかぶらせたり、多彩な民族衣装を着せるなどして売られている。クスコには特に愛着心からか、このマヌエリートを所有している人が多い。

聖像のカスタマイズ

クスコの人びとにとって、ニーニョ像は飾るためだけにあるのではない。毎年、自分のニーニョ像の洋服を替え、靴や帽子、寝具やおもちゃなど新しいアイテムを追加するのが慣例になっている。人びとは聖像を着飾ることで、独自のニーニョ像を作り上げていくのである。そうして、おめかしたニーニョ像は毎年、家族とともに教会へと連れてこられ、祝福の聖水をかける。特に二二月

二五日のクリスマスと、イエスが神の子として人びとの前に示された日である一月六日の公現祭(エピファニー)は、どの教会もニーニョ像をもった人であふれかえる。そこで見られるニーニョ像は、民族衣装でクスコ風にアレンジされたり、家族おそろいの衣装や軍服をまとったりと、千差万別である。三六年ぶりのサッカー・ワールドカップ出場を控えた昨年末は、ペルー・ナショナルチームのユニホームに身を包んだニーニョ像が目をつけた。ひとつひとつのニーニョ像には、それを所有する人びとのさまざまな思いや願いが込められているのである。

信仰をつなぐモノ

クスコでは、自宅にいくつものニーニョ像をもつ人も少なくない。自分で購入した聖像以外にも、家族のぶんや親や祖父母など親族から譲り受けたものがあるからである。なかには一世紀以上の歴史をもつ古い聖像を所有する家もある。通常、聖像は持ち主が亡くなれば、兄弟姉妹や子世代に引き継がれ、子どもがあらたな家庭を築けば、その家にも新しい聖像が迎え入れられてきた。ニーニョ像は家族の成長とともに増減を繰り返しながら、その信仰をつなぐモノであったのだ。

モノの行く末

ところが、なかには「みなしご」のようになるニーニョ像も存在する。子世代に引き取り手がおらず聖像の世話や継承が困難となる場合や、最近

では持ち主が他の宗教などに改宗して信仰が失われてしまうようなこともあるためだ。しかし、キリスト教には、日本のお焚きあげのように、不要になった聖像を処理するためのしかるべき手立てが存在しない。キリスト教では教義上、聖像は神の表象媒体にすぎないとされている。とはいえ、クスコの人びとにとって神の子の姿をしたニーニョ像は聖なるモノであって、単なるモノのように安易に捨てることは忌避される。クスコでは、そうした捨てられないモノをもって家々をめぐる、引き取り手を探すがいるという、にわかには信じがたい話も耳にする。実際、筆者も調査中に赤の他人から思いがけず聖像を授かったという人に出くわしたことがある。日本でも仏壇や位牌^{いはは}の処理をめぐる問題を聞くようになって久しい。人びとの信仰と結びついた宗教的なモノの行く末をめぐることは、やはり一筋縄ではいかないようである。



教会の祭壇の前に並べられ、聖水を浴びるニーニョ像(2017年)



さまざまな衣装とスタイルのマヌエリート(2017年)

チベットの供養塔チョルテン

小西賢吾 金沢星稜大学准教授

チベット高原の道ばたでは、白くて丸みを帯びた塔を目にすることが多い。大人の背丈ほどのものから、三、四階建てのビルほどあるものまで、大きさはさまざまである。これはチベット語でチョルテンとよばれ、仏教文化圏において広く見られる仏塔に相当する建造物である。そのルーツのひとつは、インド初期仏教で仏舍利を納めた塔



ボン教のチョルテン。先端は三つ叉の矛状(2009年)

であるストウーパであり、三重塔や五重塔などの形で日本にも伝わっている。チョルテンは「供養の対象」という意味を持ち、在家信徒がそれを建造し、礼拝の対象とする。それが善行となり、功德を積むことになる。その一方で、筆者が調査をしていた村では、チョルテンが「村や家族を守ってくれる」という語りを耳にすることが多かった。チョルテンというモノ自体にそのような力があるのだとすれば、それはどこから来たのだろうか。

モノの集合体

チベット高原東端部にあたる中国四川省松潘県、現地語でシャルコクとよばれる地域では、伝統宗教ボン教が継承されている。筆者は二〇〇九年夏、幸運にもボン教のチョルテンの建造に立ち会い、さまざまなモノが塔のなかに封入される過程を観察することができた。

塔の上部には、かつての高僧の遺骨や衣服の一部、そして神がみの像や聖典類といった、聖なるモノが詰められる。また最下部には、三つの煩惱(貪(むさぼり)・瞋(怒り)・癡(無知))をあらわすブタ、ヘビ、ニワトリの絵の上に石や刀剣、古い銃までもがおかれ、「煩惱を抑える」ことが示される。

もつとも興味深いのは中間部であり、各世帯か



隣村の土地神に相対するチョルテン(2010年)

その効力の一端を担うのである。

家族や村を守る

チョルテンは、第一には伝統的な宗教観や地理観を反映した建造物である。村はずれのチョルテンは「カヌン(防壁)」とよばれ、悪霊や敵の攻撃を防ぐ効果があるとされる。筆者が調査したものは、隣村の土地神が宿る山と相対して建てられていた。僧院の高僧の説明によると、土地神の「視線を防ぎ」、村を守る効果があるのだという。これは、ボン教が土地固有の神がみつまくつきあいながら、人びとの生活の安寧を目指す教えを

伝えてきたことを端的に示している。

同時に、チョルテンは人びとの「今」を映し出している。二世紀初頭の経済発展と観光地化、出稼ぎの増加によって、人びとの現金収入は飛躍的に増大した。その一方で、村の人口は減少し、コミュニティのつながりは希薄化しつつある。高僧たちはバラバラになりそうな人びとを教化し結びつけるような宗教実践を模索していた。こうした背景のなか、人びとが文字どおり身銭を切つて集めたモノたちをタイムカプセルのように封入することで、守るべき家族や村のかたちを浮き彫りになったのである。

ヒンドゥー教の神とモノ

福内千絵 関西学院大学専任研究員

ヒンドゥー教徒が人口の八割近く、九億人を超えるインド。イスラム教、キリスト教、シク教、仏教等々、多様な宗教が存在する国でもある。街角は色鮮やかな神がみ、聖なるもののイメージであふれ、さまざまなメッセージを発している。例えば、イエス・キリストとヒンドゥー教の象頭神ガネーシャ、イスラムのモスクのイメージが一堂に並んだ広告は、それぞれの宗教間の友愛を謳うものであるが、同時に人通りの多い路上では、例えば通りにゴミを落とさないようになど、人び

とに行動を正すよう働きかける効力をもつ。こうした「宗教的なイメージ」のなかでもとりわけヒンドゥー教の神像は、礼拝空間に入るとさらに強大な力をもつようだ。

モノから神へ

ヒンドゥー教には、神像に供物を直接ささげ礼拝するプージャーとよばれる儀礼がある。日々家庭でおこなう簡単なプージャーでは、金属製やプラスチック製の大量生産された神像をはじめ、

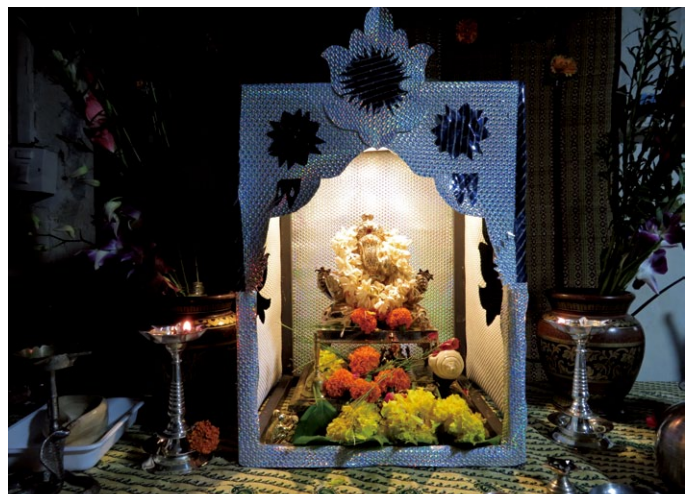
印刷された宗教画などが礼拝対象として祭壇に安置される。寺院や祭りの場では、「一点もの」の壮麗な神像が設けられる。プージャーでは、神像があたかも客人であるかのように、丁寧に扱われる。神像は沐浴後、衣を着せられ、化粧しながら白檀香の粉が施される。そして聖紐や花輪がかけられ、香や燈明、甘い食物、讃歌などが献じられる。こうした五感を刺激する一連の歓待の行為を経てはじめて、神像に神が来臨する。神像が単なるモノではなく、神そのものになるのである。

神の力へのアクセス

こうした神の招来先となる神像の顔は、大抵真正面を向いており、なにやら吸い込まれるような目ヂカラを感じさせる。ヒンドゥー教では、神に手を合わせる際、「神の目を観て、神からも観られる」という礼拝行為を重要とする。礼拝者は神の目ヂカラに接し、視線交感をおしてその強大な力にアクセスし、祝福を受けるのである。



キリスト教、ヒンドゥー教、イスラーム教の画像を用いた広告(2018年)



プージャーをおこなった家庭の祭壇(2017年)

したがって礼拝者は、神の視線を汚さないよう、必ず沐浴を済ませた浄らかな状態であることが求められる。

ふたたびモノに

プージャーでは、一連の礼拝行為の終わりに、神呪を唱えて神にいとまごいをする。こうして神像は、ふたたびモノとなる。日々のプージャーでは神像をめぐって神があらわれては去ってを繰り返す。また特別な祭りでは、最終日に別れの儀



ガネーシャ生誕祭の特設祭壇でのお参りの様子(2017年)

礼がとりおこなわれ、モノとなった神像は海や川に流される。祭りの後は夥しい数の神像が川や海に流されることになる。近年では水質汚染対策の一環で、各家庭の神像はコミュニティなどの特設プールに沈めて処理されるようになった。神が立ち去った後のモノとはいえ、たとえ破損したとしても、決して粗末にできない。今日のヒンドゥー教徒はわたしたちと同様に、環境への配慮をしつつ、聖なるモノをいかに適切に手放すかという切実な課題と向き合っている。

トルコのイスラーム礼拝用絨毯

田村 うつら 金沢大学准教授

イスラームとモノ——こだわりのなき

イスラームは、他宗教と比べてモノへのこだわりの弱い宗教といってしまうのではないか。他宗教の聖像、豪華な儀礼用品を見るにつけ、そう思う。「この世はかりそめ」という来世志向の影響もあるが、とりわけ信仰にまつわるモノについては、偶像崇拜の忌避が強く影響していることは間違いない。アッラーやムハンマドの姿を描くこともまずなければ、十字架のようなシンボルさえない。それでも、信仰にまつわるモノがないわけではない。クルアーンの章句などがアラビア文字で書かれた壁掛けなどの「クルアーン・グッズ」があり、また礼拝に用いる敷物と数珠などもある。ここでは敷物に焦点を当て、筆者のフィールドであるトルコについて覗いてみよう。



イズミル市ブチャ区内のモスク内部。床一面に敷かれた絨毯には、メッカの方角に向かって礼拝するための1人用の枠がいくつも描かれている(2003年)

トルコ人の生活と信仰

トルコの人口の九割以上はムスリムである。結婚・葬送・割礼などの人生儀礼はイスラームに則っておこなわれるし、イスラームの二大祝祭である断食明けの祭りや犠牲祭は盛大に祝われる。しかし、日々の信仰の仕方にはかなりの幅がある。一日五回の礼拝を欠かさず酒を一切口にしない人もいれば、礼拝などしたことがないと言する酒好きもいる。ともに暮らす家族のなかでも、断食をする人とならない人がいる。信仰実践は、神アッラーと個人のあいだのことであり、家族でも干渉することを良しとしない。ムスリムの五つの義務(五行)のひとつである礼拝については、男性は祝祭日や金曜午後の礼拝をモスクでおこなうことが多いが、女性は基本的に家でおこなう。男性も含め、家で祈る際には静かな部屋でメッカの方角に向かい礼拝用絨毯を広げて、神と向きあうのだ。

チープなイスラームの礼拝用絨毯

わたしのおもな調査地は、トルコのなかでも世



手織り絨毯の産地、ムーラ県ミラス地方のセツチャーデ。手織りで方向性がある。上方をメッカに向けて床に敷き、礼拝する(2005年)

俗派が多い西部エーゲ海地方である。それでもどの家にも聞けば必ずセツチャーデ(Secate)とよばれる礼拝用絨毯があり、嫁入り道具にももれなく含まれていた。客人の多いトルコ家庭では一般的に、持ち主が礼拝をするかどうかにかかわらず、無くてはならないのだ。客がちよっと礼拝をしたいと言えば、手洗い場と静かな部屋に案内し、セツチャーデと数珠を渡すのが、ホストのたしなみなのである。

では礼拝に際して敷物が必須かと問えば、そんなことはない、外で地べたでも可能と人びとは言う。でも、と付言した若い友人がいた。「礼拝の前に身を清めているし、額を地につけたりす



1970年ごろのイズミル郊外の嫁入り道具のなかから、手刺繍布のセツチャーデ(2005年)

るから、土の上や誰もが靴で歩いた場所では祈りに集中できない。セツチャーデがあると集中できる。そうそう、と周りも賛同する。
手織り絨毯の伝統的産地や手織り絨毯市場においては、セツチャーデといえば、礼拝に適したサイズで、メッカに向かって敷く際に方向が明確になるようなデザイン、厚手の手織り絨毯(前頁下の写真参照)を指す。他方、トルコの一般家庭や宿泊施設に備えつけられているセツチャーデは、

モスクなどが描かれた薄っぺらな機械織りの絨毯である。二〇〇六年に首都アンカラの街で、ムスリム用商店に入って、どこで生産されたものか尋ねたことがある。「中国製さ! 安いから」と事もなげに答えが返ってきた。なるほど、それは聖なるものでも高価なものでもある必要はない。先の友人の言のとおり、ただただ、神との対峙(たいじ)に集中できれば良いのである。いかにもモノにこだわらないイスラームらしいと妙に納得したものである。

日用品で呪いを吹っ飛ばす

中川千草(なかがわちくさ) 龍谷大学講師

呪っているのは、誰?

西アフリカのギニア沿岸部にはおもに、ススとよばれるエスニックグループが暮らしている。ススの人びとにはイスラームが広く信仰されていると同時に、「呪い」が信じられ、実践されている。物事がうまくいかない、体調を崩した、嫌な予感がする、それらの原因はたいてい呪いであり、その源は、他者からの妬みとされる。そのため、結婚、妊娠、就職、海外への移住など、「いいこと」はすべて秘密裏に進めなければならない。

「ここでの呪いの文化は、「コロミヒ」が中心となっている。コロミヒとは、呪いの力をもっている者を指す。コロミヒは、第三者から依頼されて

他者を呪うことはできず(せず)、自分自身の恨みによってのみ、呪いを実践する。その一連の行為は誰にも知られないようにおこなわれるため、人びとは誰がコロミヒであるかを知ることとはできない。しかし、呪いは確実に存在する。そのため、「あいつには呪う力があるらしい……」「この不調は、あの辺りの誰かに呪いをかけられているからでは……」などと、他者との日常的な関係性に恐れや憂いが生じる。

呪いを吹っ飛ばせ

呪う者の所在がはっきりしないためか、老いも若きも、人びとは呪いへの抵抗に熱心である。



魔除け用の服はサイズ展開も豊富(2018年)

まず、呪われないように日々、魔除け(いそ)に勤しむ。その方法は一般的に、お守りとなるモノを身につけることにはじまり、薬草を煎じて飲んだり、体に塗ったり、羊やヤギなどを供物として捧げ祈ったりと、多岐にわたる。なかでも興味深いのは、日用品を使った清めの実践だ。

ある日、中庭から突然、ポン!!という、何かが発したような音が聞こえた。驚き外に出ると、その帯には何か飛び散り、友人の顔は煤(すす)だらけになっていた。この「事件」は清めの最中



清めに使うコンデンスミルク缶(2018年)

に起こったのだが、その方法を聞き、さらに驚いた。よく熱した炭のなかに、コンデンスミルク缶を放り込んだのだという。しかも缶の封を切らないまま。なぜなら、炭で缶が熱せられ膨張し爆発することが肝心で、それがまさに清めに当たるからだ。文字どおり、呪いや悪いものは吹っ飛ばされる。

呪いとともに生きる

わたしたちは、アフリカの呪いや清めと聞くと、ついついおだやかではないことを、例えば秘密の場所や動物の皮、骨など、「まがましいモノ」を思い浮かべがちではないだろうか。もちろん、ススの人びとも似たような文化はあり、占いや祓(はら)いの専門家とされるドゥレを頼り、それ相



缶を爆発させた後の様子(2014年)

応の場所と方法で呪いに対峙(たいじ)することもある。その一方で、中庭でコンデンスミルク缶ひとつを爆発させれば、清めを完了させることもできる。他にも、ティッシュペーパーやトニックウォーターを使った方法がある。こうした日用品を使った呪いへの抵抗・清めの実践の歴史は確かに浅いだろう。しかし、呪いが横行し、日常的な人間関係に常に不安が生じているなか、身近なモノを用いた、より手軽な清めの方法が生み出されることは不思議ではない。このように呪いへの抵抗すらブリコラージュで仕上げる器用さと柔軟さにこそ、呪いとともに生きる姿が見えてくる。



薬草も魔除けの必須アイテム(2016年)

〇〇してみました世界のフィールド

アフリカ熱帯雨林の 狩猟採集民とたばこ

ほし うちつ 宇潔
民博 プロジェクト研究員



シガレットをお土産にしてきました

シガレットとお酒をもらって盛り上がり、これから踊ろうという人びととわたし (2010年)

見知らぬ土地へ単身赴き、調査を始めるには緊張がともなう。しかし、現地の人びととよい関係を築くことができれば百人力だし、毎日の調査も楽しいものになる。本号ではお土産から広がったフィールドでの交流について紹介する。

たばこは、一部のフィールドワーカーにとって、すこし特別な意味をもつものかもしれない。「現地に行くときはたばこを大量に買って持っていき、調査するときに配ったら喜ばれるし、いろいろなきが聞きやすくなる」。初めてアフリカへ渡航する際、わたしが先輩や先生からよく言われていたことばだ。わたしはそのアドバイスに従い、シガレット（紙巻きタバコ）を大量に購入し、ピグミー系狩猟採集民バカ族が暮らすカメルーン共和国南東部の熱帯雨林へと赴いた。そしてほどなくして、わたしは彼らがたばこ好きだということを知ることになったのだ。わたし専用のトイレはシガレットを二本渡せばすぐ作ってもらえたとし、会うたびに「たばこ、たばこ」と声をかけられ、まるで「たばこ」というあだ名を付けられた気分にもなったものだが、一緒にたばこを吸うことで、短時間で現地の人びとと親しくなることができた。



シガレット2本で作ってもらったわたし専用のトイレ (2010年)

最初で最後の噛みたばこ

そもそもわたしがバカ族の人びとについて調査を始めたのは、バカ族の女性たちの刺青に惹かれてのことだった。そのため、フィールドでは女性たちと一緒にいる時間が圧倒的に多かったのだが、女性たちのグループに入れてもらったばかりのころ、彼女らがときどき緑色の粉を口に入れるのを見かけた。それが何なのか気になり、「それ、何？」と下手なバカ語で聞いてみた。「ンダコ」。彼女らのひとりが微笑みながら答えてくれた。その単語はわたしが最初に覚えたもので、粉の正体はたばこだということがすぐにわかった。たばこを食べるのかと驚くわたしを見ながら、女性たちは何やら笑いながら話し合っていた。

がら男性たちに囲まれてタバコを吸うことが多くなり、まわりの女性たちからも「たばこならあなたたち男性同士でどうぞ」とからかわれるほどだった。歩くシガレット倉庫のわたしは、手持ちに余裕があるときは一人本ずつ渡していたが、人数もついでいないときは、一本を数人で共有して吸ってもらった。

しかし、いくら大量に買い込んで、フィールドワークが長期になれば、シガレットは予想以上に早くなってしまふ。在庫切れが近づくと、わたしは残ったたばこを誰にあげればよいか決めかねて、かなりストレスを感じた。ついに二本もなくなったときには、いよいよどうしようかと悩んだ。しかし、あらたな発見はまさにそのときに訪れたのだ。

「ごめんなさい、シガレットはもうないんです」。たばこを要求する男性に、申し訳なく断ったのだが、その男性の答えは「あ、そう」とあっさりしたもので、怒る様子もなく、いつものように雑談を続けてくれた。数日後、どこから手に入れたのか、その男性がシガレットを吸いながらやってきた。「さあ、どうぞ」。男性は吸いかけの自分のシガレットをくれた。「あなたのシガレットはもうないのでしょ？ だからあげるよ」。驚くわたしに、男性はさり気なくそう言った。その瞬間、わたしは自分も彼らにとってモノを共有する対象（仲間）となったことに気づいたのだ。調査のために喫煙を始め、しかもフィールドでしか喫煙しない「ニセ喫煙者」のわたしだが、そのときの感動は今でもよく覚えている。



シガレットをもらって格好良く吸う男性たち (2013年)

彼女らは畑からたばこの葉を採ってくる、火を付けた薪まきでそれを囲み、乾燥させ始めた。葉が乾くと手のひらにのせ、指でつぶして細かくし、そこへ灰を混ぜてさらにすりつぶす。わたしがその制作過程をあわてて野帳に書きとめていると、完成した粉をもつてきてくれた。「食べてみて、食べてみて」と、開いた野帳にその粉をのせるのだ。わたしは思わぬ展開にドキドキしつつも、さっそく口に入れてみた。舌が火を付けたようにヒリヒリして、思わずつばを飲み込んでしまった。それを見た女性たちは、とたんに表情を変え、口をそろえて「吐き出しなさい」と言った。わたしはすぐに粉を吐きだし、何度もうがいをしたが、喉から胃にかけてしびれるような不快感が三日以上消えなかった。こうしてわたしは、噛みたばこというものは食べるものではなく、つばも飲まずに舌や歯の下に置いて味わうものだを知ったのだ。



たばこの葉を薪の火で乾燥させる (2010年)



噛みたばこを楽しみながら雑談する女性たち(2013年)

喫煙仲間
噛みたばこを楽しむのはバカ族では女性のみで、多くの男性は煙を楽しむ、一般的なたばこを吸っていた。畑から採ったたばこの葉で作る手巻きたばこや、市販のシガレットは男性たちの大好物である。あの強烈な体験以来、噛みたばこを敬遠するようになったわたしは、女性でありな

カメルーン ★

資料名 | ヒンドゥー神像
 標本番号 | H0133567
 地域 | インド
 サイズ | 縦 92cm × 横 38cm

想像界の生物相
半人半獣のヴィシュヌ化身像

民博 グローバル現象研究部 み お みのる 三尾 稔



ヒンドゥー教の神々のなかでも、ブラフマー、ヴィシュヌ、シヴァの三体はもともと権能の強い主神として信仰を集めている。ヒンドゥー教には神や魔物、人、その他生きとし生けるものが存在する世そのものが何度も再生と破壊を繰り返すという世界観がある。そのひとつひとつの世に悪がはびこり、世界の存続に危機が迫ると、ヴィシュヌ神は自らの化身を世に送り込んで悪を滅ぼし世直しをする。化身の数には神話体系によってさまざまな違いがあるが、今日いちばん広く信じられている神話では未来の（つまり今あるこの世をいずれば破壊し、再生させる）化身も含めて十の化身があるとされる。

◆◆無敵の力◆◆

十化身のうち、最初の四つが動物と人の姿の合体形として世界にあらわれ悪と戦った。すなわち、マツヤ（魚と人の合体形）、クルマ（亀と人）、ヴァラーハ（猪と人）、そしてナラシンハ（獅子と人）である。このうち、ナラシンハは魔王ヒ

ラニヤカシプとの戦いの物語が人口に膾炙し、人獣合体形の化身のなかでは最も人気が高い。

ヒラニヤカシプは、兄のヒラニヤークシャがヴァラーハに成敗されたことを恨み、復讐を誓って長い苦行の日々を過ごす。ブラフマー神はその苦行を嘉し、ヒラニヤカシプの望みをかなえ、「どんな神にも魔物にも、人にも獣にも殺されることなく、また昼でも夜でも、いかなる建物のなかでも外でも、空中でも地面の上でも、どんな武器によっても殺されることはない」という力を授ける。

無敵の体となったことを確信したヒラニヤカシプは抗う人びとや神々を打ち倒し、遂に傲慢にも彼の世すべてを支配しようとする。まさにそのとき、ヴィシュヌ神はナラシンハ、つまり人でも神でも獣でもあるものとして姿をあらわし、昼と夜の境目である黄昏どきに、建物のなかと外の境目となるヒラニヤカシプの宮殿の入口で、空中でも地面でもない自らの膝の上で、武器を使わず素手で切り裂いてヒラニヤカシプを殺してしまう。

◆◆境目にあるものの力◆◆

右ページの木像はヒラニヤカシプがナラシンハの膝の上で絶命する瞬間をとらえている。この構図はナラシンハを描いたものとして、絵画や彫像などでよく見かけるものである。

ヒラニヤカシプは世界のすべての事物や時空間を分類し、そのどれにも負けない存在になることによって世界を支配しようとした。しかし、どんな分類や区別にも、それになじむことのない境目や曖昧なものがつきまとう。ヴィシュヌ神はその境界に宿り、慢心する魔王をあざ笑うかのように彼を討伐したのである。

ナラシンハの物語が人心をつかみ、その像が繰り返し返し作られるのは、事象を事細かに区別し分析しさえすれば世界がわかり、支配できるという思い上がりへの戒めが込められているからではなからうか。浅はかな人知のおよばない境目の部分にこそ聖なる力が宿る。境界パワー恐るべし！である。

新世紀ミュージアム

人類の文化の起源を探る手がかりとなる石器や岩絵。これらにはむかしも今も変わらない人の思いや生き方が刻まれている。本号では、南アフリカ共和国の大学博物館の展示をとおして、狩猟採集民の文化の歴史をひもとく。

アフリカ大陸は、およそ三〇万年前に現生人類ホモ・サピエンスが誕生した土地といわれる。なかでも南アフリカでは、現生人類以前に存在したとされる猿人

アウストラロピテクス属の遺跡も発見されていて、古くから人類の起源を探る研究が盛んである。二一世紀になっても、洞窟で新種の人類と推定される骨が発見されている。その研究の中心地が、国内最大の都市ヨハネスブルグにあるウィットウォーターズランド大学である。この大学は、化石人骨研究で有名なフリップ・トバイアス、岩絵研究のデヴィッド・ルイス、ワイリアムズなどの教授がかつて教鞭をとっていたこと知られる。わたしは、今年の二月に、この大学に



エランドが描かれている岩絵

付属する「オリジンセンター」(二〇〇六年開設)を訪れた。ここは、先史から現在までを三つのコーナーにわけて、各時代の「狩猟採集民」の暮らしを紹介しているミュージアムである。

人類の起源と現在

最初のコーナーの壁面には、時代別に石器が並べられている。前期旧石器時代(四〇〇万―二〇万年前)、中期旧石器時代(二〇万―四万年前)、そして後期旧石器時代(四万―一万年)の順に石器が小型化して、しかも全体の形が鋭利になっていくのがわかる。とりわけ、七万五〇〇年前のブロンボス洞窟の遺跡の紹介が印象深い。パネル展示ではあるが、オーカー(黄土)をつけた石材、穴のあいたムシロガイの貝殻などが紹介されており、人類が古くから美しさを求めた証拠ともいえる資料を見ることができ。この遺跡は、人類最古のアートが四万年前のヨーロッパにさかのぼるとす



アフリカで最大のアンテロープ類、エランドの剥製

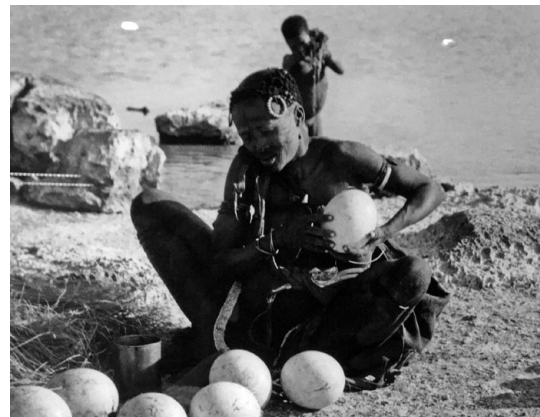
る当時の見解をくつがえした。

次は、岩絵のコーナーである。南アフリカ国内には、数多くの岩絵が存在するが、センター内には数千年前のものとされる一枚の岩絵(レプリカ)が紹介されていた。それは一頭の大動物が座っていた。それは、そのまわりに弓矢をもった人が立っている絵で、当時の狩猟の様子を彷彿とさせるものであった。わたしは、カラハリ砂漠での狩猟体験から多くの動物を見てきたので、短い角や体色の模様からその動物がエランドであることはすぐにわかった。展示場にはエランドの剥製も置かれており、その姿は頭を地面につけて、今にも倒れそうである。察するに剥製と岩絵のエランドは、弓矢の矢尻につけられた毒がまわって弱っているの

住民サン(ブッシュマン)の文化のコーナーである。運搬用ネットのなかの二個の卵殻と水場での写真によって、かつてサンが水筒代わりにダチョウの卵殻を利用していただけのことがわかる。さらに印象に残ったのは、卵殻製のビーズで装飾された腰巻きである。ビーズは、皮に縫い込みライン模様をつくるのみならず、貝殻と一緒にするしてある。女性が踊ると音が出るような仕掛けである。また、サンのトランスダンスによる治療の映像も流れていたが、ほかのコーナーで狩猟採集民の世界観について知ることができたため、治療についても理解しやすい気がした。さらに、サン語によるラジオ放送が

先住民の文化

最後は、南部アフリカに広く暮らす先



ダチョウの卵の殻の水筒に水を入れるサン



ダチョウの卵の殻を装飾に使った女性用腰巻き

あることも紹介されており、興味深いコーナーであった。

数万年続く狩猟採集民の伝統

オリジンセンターの展示構成は、南アフリカの考古や民族の特性を生かしたものであった。人類の歴史の九九パーセント以上は狩猟採集民の時代であったといわれるが、なかなかピンと来ない。しかしながら、動物とのかかわり方、ビーズを身に着ける習慣、絵を描くという行為などは、現代のわたしたちにも狩猟採集民の伝統が息づいていることを教えてくれる。



フランスのタミル人

杉本良男
民博名誉教授

映画「ディーパンの闘い」はスリランカの民族紛争を背景に、難民としてフランスに渡ったタミル人へ偽装V家族の苦難の軌跡を描いている。スリランカの紛争はあくまで後景で、移民、難民が流れ込むフランス社会の不安定性が主題である。主人公「ディーパン」の「家族」は、苦勞してスリランカを逃れ、フランスにたどり着いたものの、そこにはあらたな苦難が待ち構えていて、決して安住の地にはならなかった。スリランカの紛争は、一九八三年に始まり二〇〇九年に終結宣言が出されるまで、四半世紀にわたって続いた。この紛争を直接取り上げた作品に、「頼にキス」(マニ・ラトナム監督)や「マツリの種」(サントーシユ・シヴァン監督)などの秀作がある。

スリランカの民族紛争

スリランカは人口約二〇〇〇万人あまりの島国で、多民族、多宗教が共存している。全人口の約七割を占めるシンハラは、シンハラ語を話し、おおむね仏教を信仰している。人口の一五パーセントほどのタミルは、南インド、タミル・ナドゥ州からの移住者の末裔で、基本的にヒンドゥー教徒である。ほかに少数ながらイスラム教徒、キリスト教徒もいる。

紛争のきっかけになったのは一九八三年の暴動であ

る。この年の七月にタミル人が多く住む北部のジャフナ近郊で、シンハラ兵士一三人がタミル・ゲリラに殺害され、その後シンハラからタミルに対する報復が組織的に始まった。

紛争は次第に拡大し、タミル側は過激派組織「タミル・イーラム解放の虎」(LTTE)が北部から東部にかけて拠点を築き、政府軍と対峙した。両者は一進一退を繰り返したが、M・ラージャパクサ大統領の強硬策が功を奏して終結に至った。



住宅地のなかのヒンドゥー寺院(パリ、ラ・シャベル地区、2014年)

タミル難民苦難の歴史

紛争の影響は特にタミルの方に深刻で、八三年暴動のあと島を離れる者があとを絶たなかった。当時の冷戦構造を反映して、人びとはまずビザなしで東ドイツに入り、その後ベルリンの壁を乗り越えて西ドイツに入ったなどと噂されていた。経路はともかく、結局スイス、フランスなどに流れ着いた人び

とが多かったという。なかにはドラッグの密売などで生計を維持する者もあって、周囲からはうさんくさい目で見られていたようである。

映画の舞台になったフランスには数々のスリランカ系タミル人が定着している。首都のパリにはさまざまな人びとが集まっているが、市の北東部の一〇区にあるパッサージュ・ブラディには、おもにインド系、パキスタン系などの人が店舗を構えている。さらに北に向かうと、パリ北駅の東側にはスリランカ出身者の多いフォーブール・サント二通りがあり、道の両側にタミル語まじりの看板を掲げた商店が並んでいる。ここには一九八三年ごろからタミル難民が暮らし始め、現在では通り一帯を占めている。その少し北側のラ・シャベル地区の住宅街にはヒンドゥー寺院もある。このあたりに住むタミル人はほとんどがLTTEシンパだとい

われる。もともとこの地区は中東系の人びとが多く住んでいたが、タミル人も加わって状況はさらに複雑化した。

J・アントニダーサン

主人公を演じたJ・アントニダーサンは、一九六七年スリランカ北部の生まれ。十代半ばでLTTEに参加し、一九八七年にコロンボで逮捕された。翌一九八八年に釈放されると、ビザなしで入れた香港に逃れ、バンコクを経て、一九九三年に政治難民としてフランスを経験した。その経歴は主人公「ディーパン」と重なっている。九〇年代末からはショーパー・シヤクティの筆名で文筆活動に入り、映画にも出演するようになった。相手役のカーリーシュワリ・シーニワースンはインド・チェンナイで舞台女優をつとめている。映画では、ジャフナなまりのあるタミル語を話さなければならなかったが、アントニダーサンやチェンナイの難民キャンプにいる友人などから教わったという。子役のクロディーン・ウイナシタンビは、役と同様にスリランカ移民の子である。

パリ市内に住むスリランカ系タミル人は、次第にフランス社会に溶け込みつつある。しかし、世界の情勢は移民、難民が簡単に同化することを拒む傾向も強くなっている。フランスのタミル人の将来は安穩としたものではない。映画のラストシーンは夢かうつつか、その受け取り方は最終的に観客に委ねられる。



タミル系の商店が立ち並ぶ北駅東側
フォーブール・サント二通り(パリ、2014年)

仔ネコたちを迎え、名づけ、送り出す



What's in a name?

なが た あつ まさ
永田 貴聖

大阪国際大学非常勤講師

わたしはネコ好きである。ネコ仲間のキヨウコさん（仮名）は仔ネコを保護する活動をしている。彼女と仔ネコたちの絆^{きずな}について、名づけをとおして考えてみたい。

彼女は一時的に預かる仔ネコたちに必ず幼名をつける。黒と茶のシマ模様（サビ地）をした仔ネコ（メス）が里子として送り出された。幼名は「ザラメ」だった。「ザラメ」は同じ母親から生まれた黒ネコのオス「黒糖」と一緒に保護されていた。里親は、京都から大切な「ザラメ」を迎え、あらたに「八つ橋」と名づけた。

キヨウコさんが保護活動をはじめたのは五年前。自身も「大福」という成猫を飼っていたが、SNSを通じて友人から仔ネコの一時預かりを依頼されたことがきっかけとなった。生後約二週間の野良や迷いネコを健康になるまで育て、里親に送り出すのが彼女の役割だ。最初に保護した仔ネコは「まめ」と名づけられた。鼻のよこにまめがついたような模様があった。ネコたちの幼名は、「大福」「まめ」などのキヨウコさんの連想と、ネコの毛色や形、体の特徴でできる。なぜか和菓子と和食の名前が多いが、特に意味はない。黒ネコなら「くろまめ」、黒ネコのなかに一匹だけいる薄い灰色は「おうす」、サビ地なら「おこげ」、茶トラなら「もなか」「とら巻き」「きなこ」などである。決して、数字や記号でよばない。保護した一匹ずつに想いが込められ名づけられる。多くの場合、仔ネコたちは里親のもとで新しい名をつけられる。

昨年キヨウコさんは約三〇匹のネコを保護し、次々と里子として送り出した。ネコは抱えない。責任ある里親に任せる。一度に面倒をみるのは、同じ母ネコから生まれた仔ネコ数匹だけだ。ネコを見つけたが、飼えない人などから相談を受け、保護する。まれに、仲間を通じ、多頭飼育崩壊している家から仔ネコを預かることもある。保護活動の限界も痛感する。

キヨウコさんのもとでは、キヨウコさんの飼うネコも保護した仔ネコの世話を手伝ってくれているという。昨年他界した「大福」もそうだったが、現在飼われている「みっちゃん」「まめもち」「つぶあん」も、仔ネコには決して爪を立てずにしつけてくれるのだとか。

キヨウコさんとネコたちは、仔ネコたちを迎え、名づけ、送り出す。わたしは思う。名づけるということによりキヨウコさんたちと仔ネコのあいだに絆が生まれるのだと。だから、送り出してもさびしくない。名が変わっても、絆は消えず、里子として幸せに暮らすことだろう。



「おうす」の初トイレを見守る先住ネコの「みっちゃん」(2018年)

編集後記

本号では、八木百合子助教の本館共同研究（モノをとおしてみ
る現代の宗教的世界の諸相）と連動した特集をお届けした。小生
は調査地以外では宗教や信仰とは縁遠い生活をしている。身近で
経験することといえば、子どもを連れて正月に神社に行くくらい
か。ところで神社といえば、絵馬の書き込みをついつい覗いてし
まうという人はおられないだろうか。そこには、胸が熱くなるよ
うな切実な願いから、胃がキリキリするような卑劣な劣情まで顔
をのぞかせている。率直に言って、小生は人の弱みにつけこんで
いるようで商品としてあまり好感をもっていなかったが、本号の
宗教や信仰とかかわるモノの処遇に苦慮する話を読むにつけ、絵
馬は案外安くて、始末も手軽な手段なのかと考えをあらたにした。

追記（2018年6月20日）

このたびの地震により被災されたみなさまにつつしんでお見舞
い申し上げます。誌面の訂正は間に合いませんでしたが、本館で
も北大阪の地震の影響で企画展等の日程を変更しております。あ
らたなスケジュールが決まり次第、本誌でもご連絡させていただきます。
みなさまにはご迷惑をおかけしますが、ご理解のほどよろしく
お願い申し上げます。（丹羽典生）

●表紙：左上から時計回りに

- 1、神像（インド、H0173502～4）
- 2、嫁入り道具のお披露目会において、花嫁らによって広げられた機械織り絨毯のセツチャーデ。モスクの模様が施されたのもっとも一般的なものである（撮影：田村うらら、トルコ、2005年）
- 3、田の神（日本、H0105525）
- 4、ガラスイコン「嘆きの聖母」（ルーマニア、H0211549）
- 5、チベット仏教のチョルテン。先端は太陽と月をあらわす（撮影：小西賢吾、中国、2005年）
- 6、邪視除けのお守り（モロッコまたはチュニジア、H0127109）

次号の予告

特集

「デジタルライブラリ“DiPLAS”」（仮）

みんぱくをもっと楽しみたい方のために 国立民族学博物館友の会のご案内

友の会は、みんぱくの活動を支援し、博物館を楽しく積極的に活用するためにつくられました。
毎月『月刊みんぱく』をお届けするほか、さまざまなサービスをご用意しております。

維持会員・正会員

『月刊みんぱく』の送付／友の会機関誌『季刊民族学』の送付／本館展示の無料観覧／特別展観覧料の割引／友の会講演会への参加／研究者同行の国内外研修旅行への参加 など

ミュージアム会員

『月刊みんぱく』の送付／本館展示の無料観覧／特別展観覧料の割引／友の会講演会への参加 など

繰り返し入館できる**みんぱくフリーパス**や、学校・学部単位で利用できる**キャンパスメンバーズ**など各種会員種別もご紹介します。目的にあわせてご利用ください。

詳細は、一般財団法人千里文化財団までお問い合わせください。
(電話 06-6877-8893 / 平日9:00～17:00)



月刊みんぱく 2018年7月号

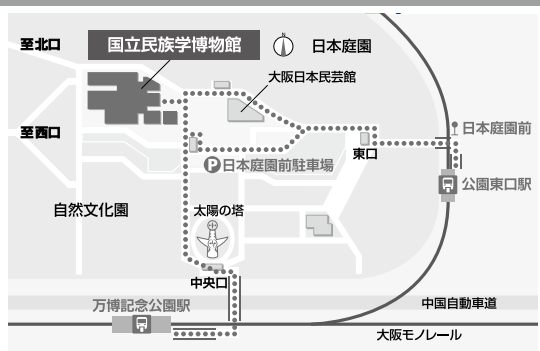
第42巻第7号通巻第490号 2018年7月1日発行

編集・発行 人間文化研究機構 **国立民族学博物館**
〒565-8511 大阪府吹田市千里万博公園 10-1
電話 06-6876-2151

発行人 園田直子
編集委員 丹羽典生（編集長） 寺村裕史 三島禎子
南真木人 山中由里子 吉岡乾

デザイン 宮谷一 長岡綾子
制作・協力 一般財団法人 千里文化財団
印刷 毎日新聞社

*本誌についてのお問い合わせは国立民族学博物館広報係に
お願いします。
*本誌掲載記事の無断転載を禁じます。



交通案内

- 大阪モノレール「万博記念公園駅」・「公園東口駅」下車、徒歩約15分。
- 阪急茨木市駅・JR茨木駅から近鉄バスで「日本庭園前」下車、徒歩約13分。
- 乗用車は、公園内の「日本庭園前駐車場」（有料）から徒歩約5分。「日本庭園前ゲート」横にある当館専用通行口をお通りください。
- タクシーは、万博記念公園「日本庭園前駐車場」まで乗り入れてきます。

みんぱくホームページ

<http://www.minpaku.ac.jp/>

みんぱくフェイスブック

<https://www.facebook.com/MINPAKUofficial>

みんぱくツイッター

<https://twitter.com/MINPAKUofficial>

みんぱくインスタグラム

<https://www.instagram.com/MINPAKUofficial/>

みんぱくYouTube

<https://www.youtube.com/user/MINPAKUofficial>

みんなのほくぶつかん みんなぱく

MINPAKU

教室で異文化体験

みんなぱくを 借りてみよう!

今回は学校の先生方にぜひおすすめしたい、本館が開発した学習キット「みんなぱく」をご紹介します。「こどものための、持ち運びできる小さな博物館」みんなぱくは、教室にしながら世界の人びとの暮らしに触れることのできる、貸出用の学習キットです。

パックのなかには、世界各地で集められた民族衣装、楽器、生活用品がいっぱい。教室で衣装を着たり、楽器の音を聞いたり、実際に世界の文化を体験することができるのです。さらに、実物(モノ)の説明や現地の写真など参考資料も豊富にそろえた Teacher's pack もついています。

カナダ、ペルー、インドネシアなどのパックに、今年4月からは「世界のムスリムの暮らし」が仲間入りし、パックの種類は全部で15種類になりました。使い方はみなさん次第です。ぜひ日々の授業にご活用ください。



貸出手続きをすると、学校にこのようなスーツケースのバックが届きます。往復の送料のみで利用が可能です



「世界のムスリムの暮らし」に入っているモノのほんの一例

新しいパックが仲間入り

世界のムスリムの暮らし (2種類あります)

アラブ世界だけではなく、世界各地のムスリム(イスラム教徒)の暮らしを広く紹介しています。

パック① 日常の中の祈り
礼拝や日々の行い、衣服などを紹介
パック② 同時代を生きる
食事や日用品、子どもたちの生活を紹介

ホームページでは活用例も紹介しています

詳細・お問い合わせ

<http://www.minpaku.ac.jp/research/sc/teacher/minpack/index>
本館「みんなぱく」担当 06-6878-8532(平日9:00~16:00)